

【アーティスト紹介】

JUSTICE (ジャスティス)



フレンチ・エレクトログループ JUSTICE。

ジャスティスが2016年にリリースした最新アルバム『Woman』や過去の曲の新バージョンを新たにパリのスタジオで制作しレコーディングした新ライブ・スタジオ・アルバム=新録ベスト盤『ウーマン・ワールドワイド』を8月にリリース。

今作のアイデアはライブ・パフォーマンスを通して発見した彼等の楽曲の新たな側面を再びライブに反映させることからスタート。1年以上の試行錯誤の末、最新アルバム『ウーマン』や過去の曲の新バージョンを新たにパリのスタジオで制作しレコーディングしたものが今作となる。ジャスティスは今まで過去2枚のライブ・アルバムをそれぞれのスタジオ・アルバムの後にリリースしており、彼等にとってライブ・パフォーマンスが如何に重要であるかが分かる。過去2作のライブ・アルバム『ア・クロス・ザ・ユニヴァース』、『アクセス・オール・アリーナ』はブートレグのような作品を目指したのに反して今作『ウーマン・ワールドワイド』は完璧なスタジオ・アルバムの様な作品を目指したと本人達は語っている。

Phoenix (フェニックス)



パリ近郊ヴェルサイユで幼馴染として育った3人によって、同じくヴェルサイユで学生時代を過ごしたフレンチ・デュオ

グラミー賞受賞歴を持ち、アメリカ最大級の音楽フェスティバルである Coachella では2013年に Blur、The Stone Roses、Red Hot Chili Peppers と並んでヘッドライナーとして出演した 世界的人気を誇るフランスのインディー・ロックバンド Phoenix。

ここ日本での人気も非常に高く、2018年にも4月に豊洲PITにてライブを開催し、多数のファンが詰めかけたことも記憶に新しい。

Basement Jaxx(ベースメント・ジャックス)



フィリックス・バクストンとサイモン・ラトクリフによるダンス・ユニット。
コア層からも支持を得ながらダンス・ミュージックをポップスに押し上げたアーティスト。99年のデビュー作から英チャート4位を獲得し、05年にはグラミー賞を受賞。フジロック04ではトリ、フジロック09ではクロージング・アクトとして出演し史上最大の観客を動員。09年に発表した5作目『スカーズ』が世界各国の主要メディアで年間ベストを獲得。同年12月には6作目『ゼファー』を発表。14年7月、再びフジロックのホワイト・ステージのヘッドライナーとして再来日。同年8月に5年ぶり7作目となる『フント』を発表。15年3月に5年ぶりとなるジャパン・ツアーを決行。東京公演では名古屋発現役女子高校生6人組アイドル、チームしゃちほこことコラボレーションを実施。同年10月、『フント』のリミックス・アルバム『フント・リミックスド』が完成。

Carl Barat (カール・バラール)



ダーティ・プリティ・シングスのフロントマンでありリード・ギタリスト。

4月26日・27日には **The Libertines (ザ・リバティーンズ)** では Pete Doherty (ピート・ドハーティー) と並び元フロントマンとして活躍し、**Dirty Pretty Things (ダーティ・プリティ・シングス)** のフロントマンも務めた **Carl Barat (カール・バラール)** が出演する。

Friendly Fires (フレンドリー・ファイアーズ)



ファースト・アルバムからの“Lovesick”で幕を開けたフレンドリー・ファイアーズのステージ。7人体制によるステージで序盤から厚みのあるサウンドを展開し、観客は1曲目にして彼らが期待通りのダンスフロアを提供してくれることを確信する。“Jump In The Pool”ではエド・マクファーレンがカウベルを高く掲げて叩き鳴らし、観客からも大きな歓声が。新曲“Can't Wait Forever”、再びファースト・アルバムの“Skeleton Boy”と続くと、もはや踊る足を止めることは出来ない。ここからはセカンド・アルバム『パラ』からの楽曲も挟まれていくのだが、なんといっても白眉だったのは今年リリースされた“Love Like Waves”だ。シーンに復帰するまで時間のかかった彼らだが、そのクリエイティビティが落ちていないことは、この曲への会場の熱気が証明していた。その後の“Paris”で最高潮に達した彼らのステージはそのブランドをものもしない、揺るぎないものだった。